

「何も考えちゃいないさ。みてただけさ。」 —鈴木清順監督作品『弘高青春物語』の表現—

尾崎 名津子¹

要約

旧制弘前高等学校の卒業生である映画監督の鈴木清順（1923-2017）は、同校同窓会の求めに応じて一本の映像作品を残している。それが『弘高青春物語』である。同窓生たちの証言をメインにパッチワークのように編まれたこの作品は、旧制高校のありようを事後的に再構成したものとして理解すべきものであり、そこにとりわけ色濃く表出するのは在校生だった戦没者たちへの追悼の意志である。さらに、在校生の多くが県外出身者であった旧制高校であれば、それはまた彼らが見た津軽・弘前の表現であると同時に、鈴木清順の作品としても受容可能な本作は、彼の映像表現を検討する上でも有意義なものである。これらの観点から本稿では『弘高青春物語』を多角的に検討し、その特色を摘記する。

キーワード：鈴木清順、『弘高青春物語』、旧制弘前高校、大学における戦没者追悼、ローカリティ

1. はじめに

1923年5月24日に東京・日本橋の呉服商の長男として生まれた鈴木清順（本名・清太郎）は、41年に東京府立第三商業卒業後、2年間の浪人生活を経て、43年に旧制弘前高等学校（以下、旧制弘前高校）に入学した。その年の12月には学徒出陣の一員として応召、フィリピンや台湾を転戦する。その後、46年に復員し、復学した清順は、48年に高校を卒業している。同年に松竹の映画学校である鎌倉アカデミア映画科に進学し、10月には松竹大船撮影所に助監督として就職した。

映画監督としての鈴木清順を一言で概括することは困難である。日活で『河内カルメン』、『けんかえれじい』（ともに66年）、『殺しの烙印』（67年）などを撮ったあと、68年には同社から解雇されたことから、テレビドラマやCMの撮影などに仕事を広げた。その後、1980年の『ツイゴイネルワイゼン』以降、81年の『陽炎座』、91年の『夢二』を公開し、映画に復活した。この三作は浪漫三部作と呼ばれている。

『夢二』公開の翌年にあたる1992年、清順は旧制弘前高校同窓会のために一本の映像作品を撮っている。『弘高青春物語』と題された56分のカラー作品で、一般公開は1993年に東京のミニシアターで14日間ほどされたきり、DVD化もされていない。さらに、文献によっては鈴木清順の作品リストにも入っていないこともある、いわば幻の作品と言えるものである。本稿ではシナリオや鈴木清順のエッセイ等の文字テキストを補助線として、『弘高青春物語』が表象する津軽やローカリティ、また、大学における戦没者追悼についても一考を加える。

¹ 弘前大学人文社会科学部

2. 『弘高青春物語』の制作過程ならびにシナリオの特色

本作の概要を以下に示す²。

〔スタッフ〕制作、著作＝旧官立弘前高等学校同窓会 プロデューサー＝岡本康司、小師乾照 撮影＝染井潤 照明＝高嶋利雄 録音＝井上宗一、滝澤修 美術＝池谷仙克 衣裳＝宮本まさ江 メイク＝関厚子 監督助手＝小松文彦、渡辺謙作 撮影助手＝本吉修、浅一卓巳 照明助手＝清野俊博、三上鴻平、壺岐尾りつ子、伊藤保 録音助手＝堀内唯史、治田敏秀 美術助手＝武井淳子、古谷美樹、相馬直樹 音響＝川崎東介 車輛＝小沢正巳、魚住敏夫 製作主任＝川嶋克己 製作進行＝高橋晋一、飯塚克味、坪井宏 合唱＝旧官立弘前高等学校同窓会有志 ヴァイオリン演奏＝桐山なぎさ ピアノ演奏＝桐山あずさ 参考資料＝旧官立弘前高等学校出版物、真山青果「大塩平八郎」、石上玄一郎「太宰治」、吉田和明「太宰治」 協力＝弘前市商工部 弘前市教育委員会 黒石市企画商工部 平賀市教育委員会 枳尾市中央高等学校 弘前女子厚生学院 劇団雪国 劇団弘演 劇団弘前劇場 劇団マップレス 弘前大学映画研究会 JAS日本エアシステム 岩木観光ホテル ニッポンレンタカー東北 青森放送 RAB 開発 NHK文化センター 陸奥新報社 弘前市のみなさん 黒石市のみなさん 枳尾市のみなさん 協賛＝みちのく銀行 製作協力＝悠

〔キャスト〕松下一矢 伊達永臣 KIM WEOMBAE 菊池陽子 江藤修司 五十嵐隆 長野卓哉 目黒晋史 長尾秋人 中野渡千寿 渡辺崇 小野俊郎 原田治 蝦名豊幸 仲地靖 榊原宏幸 米田裕 弘前中央高等学校演劇部 水野ケイ 山田尚 福井次郎 鎌田利郎 山中信人 岡本康司 玉川伊佐男 野川由美子

*1993年8月9日～15日、8月23日～29日、東京渋谷・ユーロスペースにて劇場初公開。

旧制弘前高等学校同窓会のために制作されたとはいえ、劇団マップレスや弘前大学映画研究会など、現在も活動を続けている弘前大学の学生団体が協力にクレジットされている。また、プロデューサーと制作会社が、1992年にテレビ朝日で放送した「鈴木清順のミステリー劇場」という深夜のスペシャルドラマの制作陣と同一であり、清順自身が「この二本は連動してた」³と述べている。『弘高青春物語』には岡本康司プロデューサーが屍体⁴の役で出演した他、衣裳の宮本まさ江は1991年公開の『夢二』に出演している。このように、制作スタッフが出演していたことについては、「お金（制作費——尾崎注）がない」⁵ことを理由にしている。

弘前大学附属図書館所蔵のシナリオには、表紙に「弘高青春物語 決定稿 H・四年三月十六日」、見返しに「脚本・監督 鈴木清順」と明記されている。東京都の田沼修二氏が寄贈したもので、B4の用紙にコピーされたものが二つ折りにされ、テープで綴じられている。登場人物は、朝田（高校生）、清成（高校生）、青井（高校生）、石丸（高校生）、吉村（高校生）、藤村（高校生）、花奴、女芸人、街の兄ちゃん、兄ちゃん党、ストームの高校生、女学生たち、演劇部、紫垣（高校生）、リー（高校生）、をばちゃん、詩人、語部、屍体の19名となっており、このうち先述の通り「屍体」役は岡本プロデューサーが務めたほか、語部を清順映画の常連であった玉川伊佐男、をばちゃんを野川由美子が演じている。

制作の経緯については、同窓会が当初「誰かに頼んで小説を書いてもらおうとしていた」ものの、それが叶わず急遽清順のところに話が来たことが明かされている⁶。シナリオは同窓生たちからの聞き書きや各種資料を元に構成されているが、完成した映像にはシナリオにないシーン——たとえば、弘高生がりん

² 磯田勉・轟夕起夫編『清／順／映／画』（ワイズ出版、2006年11月）p.432を元に作成。

³ 磯田勉・轟夕起夫編『清／順／映／画』ワイズ出版、2006年11月、p.381

⁴ シナリオの表記に基づく。清順自身はインタビューの中で「お化け」と言っている。磯田勉・轟夕起夫編『清／順／映／画』ワイズ出版、2006年11月、p.382参照。

⁵ 脚注4に同じ。

⁶ 磯田勉・轟夕起夫編『清／順／映／画』ワイズ出版、2006年11月、p.382

ご泥棒をするくんだり——も差し挟まれている。

野川由美子の起用について、清順は「まあ、ひとりぐらいスターさんが出た方がいいだろう、ということですね」⁷と語っていたが、野川は清順映画において重要な役者である。1963年にテレビドラマデビューしていた野川は、64年に清順の監督作『肉体の門』で主演し、評判を取った。続けて『春婦傳』（65年）、『河内カルメン』（66年）などに出演するが、これらは野川と清順の両者にとって代表作となっていく。36年ぶりに清順の作品に出演したことについて、野川自身も「先生が「弘高青春物語」（92）で呼んでくださったときは、嬉しかったですねえ。玉川伊佐男さんをはじめ鈴木組のみなさんが集まると聞いて、青森まで飛んで行きましたから。久しぶりに会った監督は昔と違って穏やかで、綺麗なお爺ちゃんになられていて……それが最後の現場でしたね」と述べている⁸。

シナリオは全19シーンで構成されている。以下にそれを示す。① 弘前の風物、② 街、③ 弘高生下宿・玄関先、④ 同・二階（雑誌新聞編集室）、⑤ 津軽の野づら、⑥ 鳶温泉、⑦ 奥入瀬溪谷、⑧ 高等学校・講堂、⑨ 十和田湖、⑩ 弘前城、⑪ 語部が、⑫ 青春の像、⑬ 街、⑭ 土手町で、⑮ 或る家、⑯ 落葉松の林、⑰ 紫垣の想い、⑱ 紫垣下宿前、⑲ 海岸。

聞き書きを元にもしていることもあり、本作品は大きな一つのストーリーを見せるのではなく、無数の断片をそのまま並べるような構成となっている。ゆえに、劇映画のように鑑賞しようとする観る者は戸惑うに違いない。これは鈴木清順という監督の特質とも関わることであろう。清順映画の特色は分かりやすい物語を終始一貫して提供することや、なにがしかの〈メッセージ〉や思想を含ませ伝えることにはない。こうした態度は、清順による次の文章にも表われている。

一口に云えば映画は思想を伝える事は出来ないという事です。映画に若し思想や哲学らしいものがあるとすれば、それはあとからやって来たもの、遅れてやって来たもの、なぞらえものに過ぎません。〔中略〕映画は松旭齋天勝の奇術と同じ見世物です。ドギモを抜く仕掛をいくつか作っておき観客をその罫にはめキヤッキヤ云わせるもので、原稿用紙は詩人が使えば詩、小説家が使えば小説、思想家が使えば哲学となりますが、フィルムの利用価値は見世物を作り出す以外に使い方はありません⁹。

しかし、全く意味が分からない作品には辛うじてならないようにする仕掛けがそこにはあると思われる。それが、定型の存在である。清順の作品が「物語の意味を徹底的に排除した」と端的に評価した長谷正人は、清順映画が「実験映画や前衛映画のように観客の物語的理解を揺るがすような抽象的な表現が意図的に作り出されているわけではなく、むしろギャング映画ややくざ映画などジャンル映画の定型的枠組みが踏襲されているにもかかわらず、観客がその意味を言葉で説明しようとした瞬間に色彩やアクションや画面の連鎖といった、映画固有の純粋な視覚的魅力が独特の相貌を持って立ち現れてくる」¹⁰ものだと指摘している。もちろん、『弘高青春物語』はギャング映画でもやくざ映画でもない。だが、そこには〈既に失われている旧制弘前高校を描く〉という一貫した目的があり、これが楔となって、一つの定型を形成していると言える。

一方で、清順作品の特徴とも言える無数の断片の並置や静止画のようにショットを構成する方法については、写真家である金村修のエッセイ「こころのない鈴木清順の映画」が示唆に富む。金村は清順映画と写真との本質的な相同性に言及する。写真は撮るほどに対象を切り刻み、「それだけではなんだかよく分

⁷ 脚注7に同じ。

⁸ 「野川由美子インタビュー 鈴木先生と一緒に闘ってくださった同志でした」（取材・構成＝伊藤彰彦）『キネマ旬報』第1744号、2017年4月、p.30

⁹ 鈴木清順「アナキストは誰だ!」（『暴力探しにまちへ出る』北冬書房、1973年6月）、引用は四方田犬彦編『鈴木清順エッセイ・コレクション』筑摩書房、2010年8月、pp.155-157。

¹⁰ 長谷正人「鈴木清順における「純粋な運動」と歴史という不純」『ユリイカ』第49巻第8号、2017年5月、p.90

からないもの」にするという。それに対してストーリーの必要性を言われるが、清順映画は「断片でも構わないのではないかと肯定するように思えたという。「ショットがつながらなくても映画というのは進行するし、それが写真みたいに静止しているといわれる理由だけけど、一つ一つのショットが独立して強度をもって存在しているから静止しているように見える」のだと、清順映画の特質を指摘している¹¹。このことは『弘高青春物語』にも当てはまる。尤も、本作は同窓生の証言の集積という、そもそもが断片の集合であった。そのことが、映画監督としての清順の資質とマッチし、一つの作品として結晶したと言え、むしろ監督の資質が前面に鮮明に押し出されたものとして、『弘高青春物語』は評価に値する作品となっている。

『弘高青春物語』は大きく三つの場面に分けられ、(1) ③から⑨までの太宰治をモデルにしたと思しき¹² 青井という高校生を軸に据えた部分、(2) ⑩の語部がおよそ2800字もの長台詞を披露する部分、(3) ⑬から⑲までのリーという朝鮮半島出身学生を軸に据えた部分の合間に、旧制弘前高校や青森県、津軽に関する無数の断片が並べられることで、一つの作品を形作っている。リーのエピソードについては清順がインタビューで「戦前の話で、実際にあったんです」¹³と語っており、これに信を置けば、この部分は聞き書きではなく清順自身が見聞きしたことである可能性が高い。

3. 鈴木清順と旧制弘前高校

清順はエッセイの書き手としても才を示し、本論の参考文献に挙げたようなエッセイ集もいくつか刊行している。「バカの一念」¹⁴と題されたエッセイには、旧制弘前高校入学に至るまでに、実家が商家であった清順が、東京商大（現在の一橋大学）を二度受験したものの不合格となり、当時南方開拓を目的としてサイゴンに開校されたばかりの興亜学院農業科を受験しようとしたがここも不合格となり、結果的に旧制弘前高校に合格、進学したことが書かれている。これが1943年4月のことである。

同年には応召され学徒出陣となるわけだが、弘前では生まれ育った東京との距離を強く感じる日々であったことが、複数のエッセイに表現されている。「戦争のあとさき」¹⁵には「ズーズー弁を馬鹿にしくさって弘前に江戸を引き込む」ような自分のことを、弘前を「知ろうとしない」と端的に総括しているように見せている。また、帰省した際に派手に遊ぶために仕送りを節約し、慈善館（当時存在した常設の映画館）と弘前城と「ゆ」（銭湯）にしか行かず、そこでも「江戸を引き込もうした日常生活の実態を次のように綴っている。

慈善館で歯切れのいいべらんめえ映画を観、城から遠く東京を想う。東京を袖にするような美型に出っ会さなかったのが幸か不幸か。仮令美型がいたとしても、眼の前の岩木山が素晴らしく見えるのは、岩木山のまわりに高い山がないからだ。あのくらいの山は他の国に行きざらにあらあ、とこのくから出、一生貧乏小説を書き続けたこのくにの小説家が云うんだからあえて逆う必要もなく、山も女もたいしたことはないんだと益々東京にこだわる。

後半の内容については、太宰治の『津軽』（小山書店、1944年11月）「序編」で「私」が岩木山について語るくだりにおいて、弘前出身で大正期の私小説作家・葛西善藏の言葉として（典拠は不明である）「自惚れちやいけないぜ。岩木山が素晴らしく見えるのは、岩木山の周囲に高い山が無いからだ。他の国に行

¹¹ 金村修「こころのない鈴木清順の映画」『ユリイカ』第49巻第8号、2017年5月、p.80

¹² 清順は「我々の学校の自慢と言ったら太宰治でね。だから太宰さんらしき人物を設定した。」と語っている（磯田勉・轟夕起夫編『清／順／映／画』ワイズ出版、2006年11月、p.381）。青井がその人物だと明言してはいないが、青井が学生間の左翼活動に加わっていること、芸者と恋愛していること、「僕は地主の子です」という台詞があることなど、太宰治の伝記的事実と一致する点が多いことから、本稿ではそのように同定した。

¹³ 磯田勉・轟夕起夫編『清／順／映／画』ワイズ出版、2006年11月、p.382

¹⁴ 鈴木清順「バカの一念」『花地獄』北冬書房、1972年6月。引用は『ユリイカ』第23巻第4号、1991年4月、pp.105-106による。

¹⁵ 鈴木清順「戦争のあとさき」『花地獄』北冬書房、1972年6月。引用は『ユリイカ』第23巻第4号、1991年4月、pp.106-107による。

つてみる。あれくらゐの山は、ざらにあら。周囲に高い山がないから、あんなに有難く見えるんだ。自惚れちやいけないぜ。」という文言を引用していることを受けたものと推定される。ただし、この場合「このくにの小説家」は葛西と太宰のいずれかを同定することは難しく、むしろ両者が二重写しになって表象されたものと解すべきである。

エッセイを読む限り、清順は弘前と馴染まず自閉した生活を送っていたように見えるが、実際のところは北溟寮に暮らし、柔道部に所属し、とりわけ孤立していたようでもない。寮の同室の学生からは本居宣長や平田神学に関する本、さらには北一輝『支那革命外史』を渡されて読んだという。この北一輝との出会いは清順の代表作の一つ『けんかえれじい』において、原作小説を改変してまで主人公で旧制中学生の麒六と北一輝とを会津で出会わせ、ラストシーンで麒六を二・二六事件直後の東京へ向かわせるという形で反映されている。清順はまた、在学中に西田幾多郎『善の研究』、阿部次郎『三太郎の日記』、出隆『哲学以前』も読んだと述べている¹⁶。これらの読書歴は旧制高校の学生としてはオーソドックスなものである。

旧制高校における読書については、自身を「世之介」（井原西鶴『好色一代男』の主人公）になぞらえた次のエッセイにも活写されている。ここにも『支那革命外史』への言及が確認できる。

幸か不幸か東北の高等学校に入ると、又ぞろ世之介は退屈を覚え、終日寮の窓に腰かけぼんやりしている日が多くなった。その隙をうかがい猫を仕掛けたとんでもない奴ばらがいた。仕掛けられた世之介は驚いた。右の耳からは『支那革命外史』、左ノ耳からは赤ん坊に乳房をいじらせているうちいい気分になって失神する女の詩を朗々と吹き込む奴、そのうえ独乙語の教師は眼の前に『若きヴェルテルの悩み』をちらつかせる。デルデスデムデンも容易にいえぬうちからゲーテの亀の子文字とは……高等学校は不親切極まるところで、出来ない奴は見向きもせずおいてけぼりだ¹⁷。

実際にドイツ語の成績は振るわなかったようだが、こうして日常的に文字テキストに接していた清順は、高校時代の日常生活や自らの位相も言葉によって象っていた。エッセイ「東京語と地方語」¹⁸では、言葉を「孤独なもの」、「セクショナルなもの」とし、地方においては「東京人の誇りなど糞の役にも立たない」と言う。そこには「東京から青森に都落ちし」、「弘前に住みついて津軽の言葉を聞いて始めて流れ者のみじめさをしみじみ知った」過去の自分が根拠としてあり、「言葉が都落ちのものあわれを感じさすのである」と述べている。しかし、このことは決して否定しざるべきことではなく、むしろ「言葉のあわれさが人間の情念をかきたてる唯一のもの」だとして、言葉の平準化に抵抗を表明している。

弘前での生活が清順に中央と地方との距離や〈中央〉に拘泥することの不毛など、自他をめぐる様々な内省をもたらしたことは明白だが、それは戦争によって表面化したようでもある。清順の実弟で同じく旧制弘前高校出身の元NHKアナウンサー・鈴木健二は、兄の変容について次のように述べている。

昭和十八年、兄は旧制弘前高校にいたのですが、学徒出陣で徴兵され、フィリピンに向かいます。門司を出た船団は十三隻あったそうですが、無事現地に辿り着いたのはわずか二隻。マニラから日本に帰る輸送船ではグラマン機の襲撃を受けてたくさんの仲間を失い、兄自身も海を漂流したそうです。喋る相手もおらず、自己内対話を繰り返さざるを得ない戦場が、内省的な兄に変化させたのかもしれませんが¹⁹。

¹⁶ 鈴木清順「本はみるものである」『読書人』1970年12月、引用は四方田犬彦編『鈴木清順エッセイ・コレクション』筑摩書房、2010年8月、p.460

¹⁷ 鈴木清順「見てある記 食べてある記」『けんかえれじい』（三一書房、1970年）。引用は『けんかえれじい』日本図書センター、2003年1月、p.72

¹⁸ 鈴木清順「東京語と地方語」『学燈』1971年9月、引用は四方田犬彦編『鈴木清順エッセイ・コレクション』筑摩書房、2010年8月、pp.67-68

¹⁹ 鈴木健二「戦争で性格が入れ替わった」『文藝春秋』2009年8月

清順は見習士官として南方総軍に配属され、フィリピンに向う途中で、船が敵潜水艦に轟沈された。さらに、台湾に向かうときにも輸送船が攻撃され、八時間にわたって海を漂流し、ようやく救助されるという奇跡的な体験をしている。その後台湾で日本の敗戦を迎えた²⁰。こうした経験を経て、清順は戦後復学し、卒業している。つまり、清順にとって高校生活は二期に分断されており、その間には戦争と従軍が横たわっているのである。以上のことを踏まえて、再び『弘高青春物語』の検討に戻りたい。

4. 「人生の無駄」と大学における戦没者追悼

『弘高青春物語』の制作についてインタビューで問われた清順は、「あたしたちの青春は、恋も革命も戦争に押し潰されましたね」と述べている²¹。戦争に「押し潰された」〈青春〉については、「人生の無駄」というエッセイにおいても表象されている。「人生の無駄」は「僕」が「そいつ」の思い出を語るものだが、予め述べれば「僕」も「そいつ」も鈴木清順の分身である。身辺雑記や写生文という意味でのエッセイとはかなり距離があり、虚構の度合いが高い。また、舞台は弘前と旧制弘前高校を思わせるものになっている。冒頭は以下の通りである。

青い空に、白い雲が動いていた。そいつは窓にもたれていつまでも動く雲をみていた。柳の葉がそいつの顔の前でゆれていた。城跡に立って、そいつは山と川をいつまでもいつまでもみつめていた。リンゴの花が匂った。リンゴ畑で、そいつは日のかげのまで花をみていた。鉄道の柵にほおづえをついて、そいつは汽車をみていた。汽車が走り去ると、そいつはまた来る汽車をいつまでも待った。

「何を考えていたんだ」

「考える？ 何も考えちゃいないさ。みてただけさ。汽車をみてただけさ」²²

窓辺で外ばかり見ている若者像はありふれたものかもしれないが、先に引用した「見てある記 食べてある記」でも清順本人を虚構化した世之介という高校生が同じことをしていた。また、「城跡」「リンゴ」という言葉や、上記の引用直後に「冬の厚い雪」といった表現もあることから、清順本人に引き付ければこれが弘前のイメージを形成していると言ってよいだろう。「僕」と「そいつ」は学校の寮住まいで親しいが、「そいつ」は「僕」に自分が何も考えておらず、ただ見ていることを繰り返し語る。果ては「便所の金かくし」になりたいと告白した「そいつ」は、金かくしについて「あいつは何をみたって何も考えずに済むんだ。目がないから何もみえないだろうが、そいつがなおさらいんだ。あいつはずっとあそこにしゃがんだままだ。何も見ない、何も考えないってことは実にすばらしいことなんだ」と言う。

その後、「そいつ」は見習士官として南方に行き、捕虜になったのち、「気狂いになって帰って来た」。それに続く本文は以下の通りである。

「気狂いになりたい。気狂いになったほうが幸福だ、とあの子の戦友は叫んだそうです。あの子一人は何をを考えているのか、叫びもせずただ黙って獄舎の壁をみつめていたそうです。気狂いになりたいと叫んだ戦友は、気狂いにもならず戻ってきましたが、あの子だけは気狂いになって帰って来ました」
精も根も尽き果てた感じの母親が言った²³。

母親は息子が「だれかに人生を無駄にさせられた」と言う。これがエッセイのタイトルになっている。

²⁰ 四方田犬彦「清順師との対話」『ユリイカ』第49巻第8号、2017年5月、p.127 参照。

²¹ 磯田勉・轟夕起夫編『清／順／映／画』ワイズ出版、2006年11月、p.382

²² 鈴木清順「人生の無駄」『けんかえれじい』（三一書房、1970年）。引用は『けんかえれじい』日本図書センター、2003年1月、p.44

²³ 鈴木清順「人生の無駄」『けんかえれじい』（三一書房、1970年）。引用は『けんかえれじい』日本図書センター、2003年1月、p.45

母親に対して「僕」は「そいつ」が雲、リンゴ、汽車のことを言っていなかったかと問うが、答えは「いえ」である。それどころか、何を話したかわからないと母親は語る²⁴。

一連の流れを通して表出されるのは、一つに何も考えずに見るだけの存在でいたいと願い、それを叶えた一人の青年の姿、そして、かつてあった出来事としての確かさを失った雲、リンゴ、汽車という、弘前を象るイメージである。後者については、『弘高青春物語』の次のモノローグと一致する。

シナリオ シーン⑩ 紫垣の想い
喧嘩ねぶたを見たような気がする
お山まいりを見たような気がする
地藏まつりを見たような気がする
傍に女の子がいたような気がする

このモノローグは終盤、リーと紫垣の物語の半ばに配置されている。二人の物語の直前には、語部による長台詞（シーン⑪ 語部が）が置かれているが、その末尾は次のようになっている。

インターハイを目指し猛練習をした運動各部が、弘前駅前で行進の陣を張るや、突如雷鳴落雪土砂降りのインターハイ中止の通告、暗胆として空を仰ぐ島河（聖明）さんの頃から、弘前と高等学校があやしくなり、第二次世界大戦が始るや真っ暗闇となる。笠森山も岩木山も岩木川も見えなくなり、学徒出陣、勤労働員で高校生は弘前から出て行き、北海道標津、青森油川、日立多賀、そして戦場が高校生の人格にかゝって来た。

た、かいの心さだまる冬嶺星 鵬生
盆の月子は戦場のつゆときゆ 蛇笏

アメリカ兵の前で弁慶の立往生をし、七十数発の弾を浴びて戦死した津田（清太郎）さん
魚雷艇で敵艦に体当たりし二階級特進した太田（万作）さん
B29を撃墜し自らも傷を負い、基地に戻り報告を済ませると同時に戦死した（ ）さん
等々弘前高等学校卒業生、在校生の戦士、戦没者の数はさだかではない。

上記のナレーションの間、映像は暗闇の中の焚火を延々と映している。そこに特定の人物は登場せず、観る者は語部の声を聴くのみ状態を強いられる。シーン⑪の大半は語部本人が登場し、その背後を行き交う学生たちや地図を広げる演出などの多様な動きがある。それに比べると事態は異質であり、清順の特徴である静止画に近い。しかし、計算された画を見せる静止画的方法ではなく、ここでは画よりも声に焦点が当てられる。

つまり、『弘高青春物語』は旧制高校生のいわゆるバンカラな日々を描いた前半から、後半に学徒出陣と在校生の戦没者について語部に語らせることで、その事実を脚色なく伝えることになっている。この場面を経て、先の紫垣のモノローグに至れば、旧制高校が築いてきた習慣や文化だけでなく、そこに生きたはずの学生が学徒出陣によって損なわれ、後に残ったのは「～ような気がする」という言い方に担保される、習慣や文化の幻影に過ぎない断片となるのである。ここにおいて『弘高青春物語』は、「何も考えちゃいないさ。みてただけさ。」と言った「そいつ」——見ているだけの存在となることを、狂気に陥ることによって叶えたように見える、戦後を生きる「そいつ」——のあり方とも重なっていく。

²⁴ 鈴木清順「人生の無駄」『けんかえれじい』（三一書房、1970年）。引用は『けんかえれじい』日本図書センター、2003年1月、pp.46-47

白井厚は日本の大学における戦没者追悼が未だ充分になされていないことを指摘し続けている。追悼の形は様々であり、白井も「時に誤った戦争観や英雄崇拜に基づいていることはまた別に論ずべき重要な問題なので、大学における戦没者追悼は、十分な研究に裏付けられていることが望ましい」²⁵と述べている。まずもって問題なのは、戦時下にいわゆる学徒出陣を行った教育機関において、戦後に戦没者名簿が編まれた学校が数えるほどしかないということである。『弘高青春物語』の語部の長台詞も「弘前高等学校卒業生、在校生の戦士、戦没者の数はさだかではない」と締めくくられていた。戦没者追悼は様々な理由から反対を受けることも考えられるが、かつて教育機関から戦没者を積極的に出してしまったことを「なかったこと」にしないためにも、この語部の言葉があるように今は見える。

5. おわりに

『弘高青春物語』は商業作品ではなく、あくまで旧制弘前高校の同窓会のために制作されたものである。本作が本学附属図書館にVHSの形で所蔵されていることはその記録という意味で非常に有意義なことであるが、意義はそれだけに止まらないことはこれまで述べてきた通りである。最後に保存の形式について付言すると、VHSだけではこの先を考えた時にやや心許ない。DVDなど他のメディアでの保存も今後検討されることが望ましいのではないだろうか。

< 付記 >

本稿は弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター令和3年度地域未来創生教育・研究プロジェクト「地方から公共性を問い直す——ローカルメディアを基点として」（区分：調査・研究プロジェクト、部門：文化資源・地域文化研究部門）の成果である。

< 参考文献 >

- 『ユリイカ』第23巻第4号、1991年4月
 鈴木清順「弘高青春物語 決定稿」1992年3月、pp.1-38
 磯田勉編、轟夕起夫協力『清順スタイル』ワイズ出版、2001年3月、pp.1-109
 『文藝別冊 鈴木清順』河出書房新社、2001年5月
 鈴木清順『けんかえれじい』日本図書センター、2003年1月、pp.1-399
 磯田勉・轟夕起夫編『清／順／映／画』ワイズ出版、2006年11月、pp.1-493
 鈴木健二「戦争で性格が入れ替わった」『文藝春秋』2009年8月
 白井厚監修／慶應義塾大学経済学部白井ゼミナール『共同研究 太平洋戦争と慶應義塾大学 本文篇』慶應義塾大学出版会、2009年11月、pp.1-125
 四方田犬彦編『鈴木清順エッセイ・コレクション』筑摩書房、2010年8月、pp.1-487
 白井厚『大学における戦没者追悼を考える』慶應義塾大学出版会、2012年11月、pp.1-264
 『キネマ旬報』第1744号、2017年4月
 『ユリイカ』第49巻第8号、2017年5月

²⁵ 白井厚『大学における戦没者追悼を考える』慶應義塾大学出版会、2012年11月、p.49